



特別展  
美を紡ぐ 日本美術の名品  
—雪舟、永徳から光琳、北斎まで—

開催のご案内



写真上：  
「唐獅子図屏風」  
狩野永徳筆  
宮内庁三の丸尚蔵館蔵

写真下：  
国宝「檜図屏風」  
狩野永徳筆  
東京国立博物館蔵



このたび、東京国立博物館、文化庁、読売新聞社は、特別展「美を紡ぐ 日本美術の名品 —雪舟、永徳から光琳、北斎まで—」を、2019年5月3日（金・祝）～6月2日（日）に開催する運びとなりました。

本展は、「日本美を守り伝える『紡ぐプロジェクト』—皇室の至宝・国宝プロジェクト—」の一環として開催するもので、主催の東京国立博物館、文化庁が、宮内庁三の丸尚蔵館の協力を得て、日本美術の名品を選びすぐり紹介するものです。狩野永徳筆で、皇室ゆかりの名品である「唐獅子図屏風」と、永徳最晩年の名品で国宝の「檜図屏風」を、会期前半と後半に分けてそれぞれ公開するのに加えて、雪舟、尾形光琳、葛飾北斎らの名品を、一堂に紹介する展覧会となります。

中世から近世の名だたる日本美術の名品を公開する本展を、より多くの方に知っていただきたく、本展周知にご協力賜れば幸甚です。

## ■開催概要

日本美を守り伝える「紡ぐプロジェクト」—皇室の至宝・国宝プロジェクト—

名称：特別展「美を紡ぐ 日本美術の名品 —雪舟、永徳から光琳、北斎まで—」

会期：2019年5月3日（金・祝）～6月2日（日）

※5月6日（月・休）を除く月曜と5月7日（火）は休館

会場：東京国立博物館 本館特別4・5室

主催：東京国立博物館、文化庁、読売新聞社

協力：宮内庁

開館時間：午前9時30分～午後5時

※金・土曜日は午後9時まで ※入館は閉館の30分前まで

以上

### 主な作品① 宮内庁三の丸尚蔵館所蔵の名品

「唐獅子図屏風」六曲一双

右隻：狩野永徳筆 安土桃山時代・16世紀／左隻：狩野常信筆 江戸時代・17世紀



狩野永徳(1543-90)は、安土桃山時代に活躍した狩野派の代表的な絵師で、その勇壮な画風は日本美術史の中でも特筆されます。その代表的な傑作である「唐獅子図屏風」は、もとは城内の床貼付け、あるいは陣屋屏風とも言われる特に大型の作品です。江戸時代に曾孫にあたる常信が左側に同大の画面を補って、一双の屏風として伝えられました。両者の全く異なる画風も興味深いところです。

※5月3日（金・祝）～19日（日）展示

### 主な作品② 東京国立博物館所蔵の名品

国宝「檜図屏風」狩野永徳筆 四曲一双 安土桃山時代・天正18年（1590）



狩野永徳の最晩年の作で、桃山時代の金碧障屏画の一つ。天正17年（1589）に念願の実子・鶴松（棄丸）を得た豊臣秀吉は、その翌年に猶子としていた正親町天皇の孫・智仁親王との関係を解消し、かわりに八条宮家を創設して御殿を造営させました。その御殿のために狩野永徳一門が描いた障壁画の一部が、この檜図です。現在は屏風に改装されていますが、「大蛇が奔るが如き」と評された永徳の力強い表現は失われていません。八条宮家の後身である旧桂宮家に伝えられた後、宮内省に引き継がれ、大正時代に帝室博物館（現東京国立博物館）に移管された作品です。

※5月21日（火）～6月2日（日）展示

### 主な作品③ 東京国立博物館所蔵の名品

国宝「秋冬山水図」雪舟等楊筆 二幅  
室町時代・15世紀末～16世紀初

本作品は、落葉した木のある手前の岸から、ジグザグの山道を経て、遠くの楼閣を見晴らす秋景と、切り立った巨大な崖のもと、雪深い山間の道を踏み分けていく一人の旅人を描く冬景からなります。本図では、近くから遠くへと岩山を配置することで、奥深い空間が表現されており、雪舟以前の日本の水墨山水画には見られなかった構築性が明確に示されています。

※通期展示



### 主な作品④ 文化庁所蔵の名品

重要美術品「花鳥遊魚図巻」長澤芦雪筆 一巻 江戸時代・18世紀



長澤芦雪は、江戸中期に活躍し、円山応挙の弟子として知られます。曾我蕭白や伊藤若冲とともに「奇想の画家」として位置づけられ、高い評価を得ています。本作は、身近な動植物を巧みな筆致で描き出した画卷です。その詩情豊かな描写は、近世花鳥画卷の中でも屈指の出来栄えと言えるでしょう。

※通期展示

## 主な作品⑤ 宮内庁三の丸尚蔵館所蔵の名品

「更級日記」藤原定家筆 一帖 鎌倉時代・13世紀



平安時代中流貴族の一女性、菅原孝標の娘による回想記で、『源氏物語』が書かれて評判になった少女時代から、夫に先立たれた晩年までが記されています。現在写本の祖本として、また藤原定家（1162～1241）の作品として、よく知られています。

※5月3日（金・祝）～19日（日）展示

## 主な作品⑥ 文化庁所蔵の名品

重要文化財「色絵若松図茶壺」仁清作 一口  
江戸時代・17世紀

仁清は丹波（現兵庫県の一部）出身で、京焼の大成者として名高い陶工です。この茶壺は仁清黒とよばれる光沢のある黒釉が掛けられており、土肌の部分を土坡に見立てて、金で山並みを表し、赤、緑と金銀を用いた若松、椿などの図がリズムカルに配置されています。讃岐国（現香川県）丸亀藩主京極家に伝来しました。

※通期展示



### 〈紡ぐプロジェクトとは〉

皇室ゆかりの優品や国宝・重要文化財をはじめとする日本の美を、広く国内外へ、さらに未来へ紡ぐために、文化庁、宮内庁、読売新聞社が協力して進めていくプロジェクトです。

特別展覧会の開催に加え、フォーラムなど関連事業や、日本美術・文化の魅力を発信するポータルサイトの開設、文化財修理事業をプロジェクトの柱として実施します。貴重な文化財・美術品の公開を通じて得た収益の一部を修理に充てることで、文化財・美術品を後世に紡いでいくために欠かせない「保存、公開、修理」という一連のサイクルが永続する仕組みを作っていきます。

### 《本件に関するお問合せ先》

「美を紡ぐ 日本美術の名品 一雪舟、永徳から光琳、北斎まで」広報事務局 担当：岩川  
〒150-8551 東京都渋谷区渋谷 1-3-9 ヒューリック渋谷一丁目ビル 3F  
TEL：03-3406-3419 FAX：03-3499-0958 E-mail：tsumugu2019@ypcpr.com